



# ピッポ新聞

2006

4

No.208

## 子どもの本専門店

年間購読料(送料込み)1500円

編集・発行 伊藤俊男

URL <http://www.pippo.co.jp>Email [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

# ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL &amp; FAX 0543-45-5460

遅ればせながら、仕掛け絵本  
を考えてみる

先日、お客さんが一冊の絵本を「これと同じ絵本ありますか?」と持ってきた。見ると小型の絵本で『じどうしゃがいつぱい』というタイトルの仕掛け絵本だった。その本はページがバラバラになっていて、すでに絵本の機能を果たすことができない状態になっていた。お客さんは小児科医院の人で、この小児科は絵本や玩具コーナーを設けて置いてあるのだが、これは小さい子たちにとっても人気のある絵本だという。だからこそ買い換えるのだろう。しかし、当店には仕掛け絵本の類は在庫を置いていないので、取り寄せることにした。(後で調べたら版元の大本絵画では現在品切れだった)

仕掛け絵本といえば、去年の一時期、連日当店にそれを求めるお客さんがきた。それも多いい日には2人も3人も仕掛け絵本を買いにくるのである。しかも、「ロバート・サブダの仕掛け絵本ありますか?」と、具体的に作者の名前まで挙げるのだ。(ぼくはこの作者の名前すら知らなかった)こんなことは今までになかった現象である。(何が?仕掛け絵本をもとめるということもそうだが、店にお客さんが押し寄せることが!押し寄せるはちょっとオーバーな表現かな?)

お客さんに聞いてみると、どうやらテレビで紹介されたからだという。お客さんを批判する気

は毛頭ないが、それどころか、「絵本」ということで即、ピッポに来てくれたことだけでとても嬉しいことだ。だからぼくはこのお客さんたちにも可能な限りピッポではなぜ仕掛け絵本を置かないかを説明した。



『スルンブルン伯爵』(大型紙かけ絵本・大日本絵画) 市立図書館の本音の出るページの音が出ない

いのだそう。理由は、「仕掛け絵本」は手作りの部分があつて、一度にたくさん作ることができないからだという。

だがしかし、テレビで紹介されたからと本屋に買いに走る現象を子どもの本屋として単純にやるこんでよいものだろうか?

仕掛け絵本には様々なものがあるが、代表的なものはポップアップといわれるもので、ページをめくると絵が立体的に飛び出すもの。他にはフリップという、画面一の部をひっくり返したり、うごかしたりするものや、フラップという、

それでも欲しいというお客さんの注文はお受けして、発注したのだが、すべて在庫切れだったのである。これまた驚いたことに、版元(大日本絵画)いわく、来年(2006年)の9月までできあがるのを待たなければなら

折り畳まれたページを開くと別の絵がでてくると仕掛けのものがその代表的なものである。最近では、ページを開くと音が出たり臭いが出てくるものまである。

ここまで書いたところで、思い当たって市立図書館へかけて、仕掛け絵本を実際に見ることにした。司書にお願いして仕掛け絵本のリストをプリントアウトして貰ったところ、そこには155のタイトルが載っていた。



『コロちゃんのはこう』評論社

そのリストの中にはエリック・カールの作品が一冊も含まれていなかったの、司書に聞いてみると「パソコンで仕掛け絵本というキーワードに引っかけたものだけのリスト」だという。丁寧にさがしていけば仕掛け絵本はまだまだあることだろう。予想以上に多い点数だ。リストのなかから何冊かをみせてもらうことにした。本は閉架書庫にあるということ、地下から出してきてくれた。

4冊を見せてもらったのだが、そのすべての本の仕掛けの部分は何らかの痛みがあった。破れてしまった箇所、何度も繰り返し開いたことによって、隠れた絵がむき出しになってしまったり、仕掛け絵本としてのお

もしろさがすでに失われてしまったもの、ページを開くと音が出ると説明があるが、もはや音など出なくなってしまうものなど予想通りひどい状態がそこにあった。

おそらく、初め開架棚に置いて貸し出していたものを、破損がひどいので、閉架書庫にしまっているのだろう。図書館など不特定多数の人たちが手にする本はただでさえ汚損しやすいのである。ましてや、仕掛け絵本は一部を動かすことによって成り立っている絵本である。しかも本であるから、素材は紙、加減をあまり考慮しない子どもがあつかえばすぐ破損することは明らかだ。だから、仕掛け絵本は図書館に一番向きな絵本なのだと、ぼくは思った。

実はぼくが仕掛け絵本を店に置かない理由の一つはここにあるのだ。

破損した仕掛け絵本は修理が利かないのである。例えば、評論社から10冊ちかく出ている「コロちゃん」シリーズという仕掛け絵本がある。内容は、犬のコロちゃんがお母さんと散歩の途中なんにでも興味を示し、何処でも顔をつっこむという話。コロちゃんの興味の対象は隠されていて、そこを開けると何であるかが判るようになっていく。当然子どもはその未知の部分は何度も何度も開閉するわけだが、素材が紙であるから、折れ癖がつきそのうち元に戻らなくなってしまうのだ。場合によっては、隠れた絵は見えつぱなしになってしまい、仕掛け絵本としての体をなさなくなってしまうのである。

こうなってしまうと、もはや修理は不可能なのである。だから、仕掛け絵本は繰り返し読めば読むほど、絵本としての機能を失ってしまう本なのである。ぼくはこれが仕掛け絵本の宿命なのだと考える。

さて、述べてきたように、仕掛け絵本の第一の問題点は、読めば読むほど破損して絵本としての機能が失われてしまうことにあるのだが、次に、絵本というものが子どもにとってどういうものであるのかという視点から、仕掛け絵本を考えてみたい。もとより、ぼくは絵本とはこういうものであるなどとは決めつける気はないし、ましてや絵本はこうあるべきだ、などというつもりもない。なにしろ最初の仕掛け絵本はすでに14世紀にドイツで作られたというから歴史も相当古いのである。その限りにおいては、仕掛け絵本を否定しようなどとはまったく考えていない。



仕掛け絵本の傑作「はらぺこあおむし」エリック・カール 偕成社

どんなかたちや内容であったとしても、絵本の作者にとってその表現が必然であるならばどのような仕掛け絵本だろうがかわらないと思っている。当店でも人気絵本の一冊、エリック・カール

ルの『はらぺこあおむし』(もりひさし・訳 1260円 偕成社)のように、あのページに空けた穴という仕掛けは、読者に驚きと感動すら与えてくれる。その表現と手際の良さは作者の独自性と必然性を感じさせ、すぐれた芸術であると思う。



右は大日本絵画の「つまみひきしかけえほん」市立図書館の本引っ張ると絵がスライドして別の絵に変わりしかえになっている。左は講談社・岸田衿子訳の「のぼらの村のものがたり」この絵本は現在は版元品切れ中



『雪の日のパーティー』(岸田衿子・訳)

ところが、今出版されている仕掛け絵本の多くは、絵本の創作上の必然から仕掛けを施したということではなく、仕掛け絵本のための仕掛けでしかないのである。

ここで、市立図書館からかりた『雪の日の舞踏会』(ジム・バー

クレム・作 植野和子・訳 1575円 大日本絵画)を見よう。これは講談社から翻訳出版されている、のぼらの村のものがたりのシリーズの一冊

の仕掛け絵本版である。タイトルの下に(つまみひきしかけえほん)と表示されているように、各頁の突起をつまんで引くと、画面の絵がスライドして別の絵に変わる仕掛けになっている。

これも、先程来述べたように仕掛け絵本の宿命の通り、スライドの絵がずれていた

り、途中でひっかかってスムーズに変わらなくなっている個所や、破れているものもあるといった状態である。

さて、これを絵本としてみた場合どんなことが言えるのだろうか?このスライドして変わる絵は絵本の内容に即して必然かといえばまったくそんなものは感じることができないのである。原作の『雪の日のパーティー』と比べると内容もかなり翻案化されている。

そしてぼくはここが一番大事なことだと考えているのだが、これを子どもに「読み聞かせ」した場合、子どもは引っ張ることに心を奪われて、話の内容を楽しむどころではないだろう。結論を言ってしまうと、仕掛け絵本は、子どもたちにとっては刺激的ではあるが、絵本としての役割をはたさない「絵本」なのである。

この話は、テレビで紹介されて、ピッポに買いにきたお客さんの話からはじめたが、実は昨年あるテレビ局からも、クリスマスが近づいたころ電話があり、「ロバート・サブダの仕掛け絵本ありますか?」という問い合わせがあった。

そこでぼくは、そう!向こうから掛かってきた電話だし電話代がかからないからと

思い(せこいな!)ここぞとばかりに、「あなたがたがテレビで中途半端に仕掛け絵本なんかを紹介するから、絵本というものが誤解されるのだ」などと延々15分も喋ってしまったのである。

最後に仕掛け絵本の中には、とても精巧にできているものもあるが、それはもはや子どものための絵本という範疇を越えたもので、大人の趣味、あるいは部屋のインテリアとしての「絵本」ではないだろうか? ぼくは絵本を子どもが読む(読んでやる)ものであると規定した場合、仕掛け絵本は子ども向きではないと思う。仕掛け絵本は、絵本というものをどう考えるかによって、その評価と判断は別れるところである。

さて、みなさんは仕掛け絵本をどう考えますか?

「山里からの便りの」の佐久間さんのネイチャースクールへのお誘い

『樹に彫る』―立ち木彫りと間伐体験―

5月7日(日)・16日(火)・28日(日) 午前9時半から午後4時半 集合場所 山梨県南巨摩郡増穂町平林下河原(下川原バス亭) 対象18歳以上 参加費 5000円 定員10名 (各回) 詳細は及び申し込みは0556・22・6479か E-mail: seburi@navy.plala.or.jp

5月7日(日)・16日(火)・28日(日) 午前9時半から午後4時半 集合場所 山梨県南巨摩郡増穂町平林下河原(下川原バス亭) 対象18歳以上 参加費 5000円 定員10名 (各回) 詳細は及び申し込みは0556・22・6479か E-mail: seburi@navy.plala.or.jp

ねー、この本読んだ？

『どうぶつさいばん タンチョウは悪代官か？』(竹田津実・文 あべ弘士・絵 1470円 偕成社)



特別記念物であるタンチョウが人間の保護のもとふえずぎで、他の生物たちへその影響が出始めた。そこで、北の動物たちがタンチョウを被告にして裁判をひらいたが、。さてどんな判決がでるのだろうか？

簡単に結論を出さずに、読者にタンチョウを巡ってのさまざまな問題を問いかけるかたちになっている。

『ケイゾウさんは幼稚園で飼われている雄鳥』(市川宣子・作 さとうあや・絵 13645円 福音館書店)

全部で10編のケイゾウさんとウサギのみみこと幼稚園の子どもたちが繰り広げる事件を描いた短編絵童話。



ある。ケイゾウさんの皮肉とばやきや怒りがユーモアになっていて、話もとてもわかりやすく展開していくから、幼児にも喜ばれること請け合い！

面白いのはこれらの話が雄鳥のケイゾウさんの目を通して語られていること



『おじいちゃんは水のおいがした』(今森光彦・文・写真 1890円 琵琶湖で長年漁をしている三五郎さんとおして、四季の自然の営みや、それを上手に利用して暮らしている人たちの写真と文で津宇津っている。水は人間だけのものではなく、そこにはさまざまな生き物の暮らしがあり、それがまたいかに人間に取って大切であるかを教えてくれる本。

面白いのはこれらの話が雄鳥のケイゾウさんの目を通して語られていること

『ハコの牧場』(北村恵理・作 金井英津子・絵 1680円 福音館書店)  
これは著者が子供時代育った北海道の牧場の物語。いわば著者の自伝でもある。自然豊かな広い牧場で牛をかい、おじいさんを中心に日々の暮らしが、主人公ハコちゃんを目を通して描かれている。この物語では今の子どもたちが失っている自由と表現の自由と題しまして公開質問状を出しましたが、4月11日現在まだ回答をいただけておりません。これをお読みいただいた方からは、どんな回答だったか、問い合わせを多数いただいておりますが、残念ながら、今月号には間に合いませんでした。5月号には掲載できると信じておりますから、お待ち下さい。



先月号(3月号)で福音館書店に「本の価額と表現の自由」と題しまして公開質問状を出しましたが、4月11日現在まだ回答をいただけておりません。これをお読みいただいた方からは、どんな回答だったか、問い合わせを多数いただいておりますが、残念ながら、今月号には間に合いませんでした。5月号には掲載できると信じておりますから、お待ち下さい。

お知らせ

★福音館から復刊されました！

『すばらしいとき』(マクロスキー 1575円) 『まどのそとのまたむこう』(センダック 2100円) 『ねいさんといもつと』(ゾロトール 1155円) 『しあわせなふくろう』(ホイテーマ 1365円)